

卒業生 特集号
新入生

1983年3月25日

No.24



ひ

しょう



(タイの農村の夕暮。子供が牛を追って帰途につく。)
スリン県で。1982年8月、山下彰一教官撮影。

—目

| | | |
|-------------------------|------|---|
| '83 総科カレンダー | 編集部 | 1 |
| 新しい出発に際して | | |
| —総合科学部新入生に— | 岡本哲彦 | 2 |
| 『飛翔』紹介 | | |
| —交通信号としての『飛翔』 | 編集部 | 3 |
| 特集 我が「青春」に悔いなし!? | | |
| その1「テニス部の思い出」 | 上本典子 | 4 |
| その2「目指せ!熱中教師! (社会科の巻)」 | | |
| | 坂井幸浩 | 5 |
| その3「ガラスのジェネレーション・就職戦線! | | |
| 我、かく闘えり!」 | 畑尾武海 | 6 |

—次—

| | | |
|-----------------|-------|----|
| その4「総合科学部に在籍して」 | 藤本桂子 | 7 |
| その5「総合科学部と私」 | 福高永太郎 | 8 |
| 特別研究論文題目紹介 | | 8 |
| 就職委員会だより | | 13 |
| 自由投稿 | | |
| 「わがフェニックス駅伝奮闘記」 | | |
| | 井川篤宏 | 15 |
| 学部の記録 | | 16 |
| 編集後記 | | 19 |

総科カレンダー

編集 部

〔4月〕

- **入学式** (8日) : 憧れの(?)大学生活のスタート。おめでとう。
- **前期聴講受付** (13~26日) : 時間割の組み方, 単位のとおり方, わからないことは先輩方にどんどんきいちゃおう。
- **オリエンテーションキャンプ** (29~30日) : 広大ならではの企画。友人をつくり、先輩と親しくなるチャンス。
- **新歓コンパ** : 大学生といえばコンパ。飲んで、歌って総科は一つ。大学生っていいなあ。

〔5月〕

- **西条研修** (14~15日) : 数年先に移転する西条へ行って泊り込みの研修を。研修といっても堅苦しいものではないはず。先生方とお話しよう。
- **春季ソフトボール大会** : 総科の学生・教官・事務官による大会。ソフトで汗を流した後は……。

〔6月〕

- **六月祭** : クラブ、学部の有志が森戸道路へ店を出してひともうけ(?)。新入生もぜひ参加。

〔7月〕

あっという間に夏休み。

〔8月〕

もちろん夏休み。計画はシッカリ立てて、何かをやろう。

〔9月〕

- **前期試験** : 新入生にとっては、初めての試験。何かと不安でしょうけど、先輩も不安なんですよ。

〔10月〕

- **試験休み** (1~14日) : 結果を見るまでもなく惨敗の人も、ヤッタネという人もひと息つける。ちょっとした旅行に出るのもいいかも。
- **成績発表** : ドキドキします。自分の思った通りでなくてガッカリしているうちは救いがある。落ちても気にしなくなったら……おしまい。また、このころにコース決定のガイダンスがあります。しっかり説明をきこう。

〔11月〕

- **大学祭** : 大学最大のイベント。市中パレード。店出し。もう3日間、夜おそくまで飲めや、歌えの大騒ぎ。
- **秋季ソフトボール大会** : 春のかたきうちを。チーム一丸となって優勝をねらえ。

〔12月〕

- **冬季休暇** : 久しぶりに家族そろって、こたつを囲んで大みそかをむかえるのもいいもの。

〔1月〕

- **共通一次試験** : 新入生は昨年の自分を振り返り今の自分の学力を嘆く!/?

〔2月〕

- **後期試験** : へんに試験慣れして痛い目にあわないように。
- **祝賀パーティー** : 総科全体で卒業生をお祝いしよう。

〔3月〕

- **卒業式** (26日) : おもえば短い4年間。So long. 大学生活。
- **春休み** : 1年なんてあっという間。次年度までの充電期間。



ひっくり返せぬ少時計

新しい出発に際して

— 総合科学部 新入生に —



新入生の諸君、入学おめでとうございます。諸君はさまざまな社会的・教育的雰囲気の条件のなかから大学に入学して来ました。従って諸君は入学当初から色々と矛盾した、或いは急変した心理状態におかれると思います。諸君は今まで大学入学と云う目標に向かって張りつめた緊張感で過ごしてき、受験の動機がいずれであったにせよ、とにかく入学を果たしたということからくる安堵感と一種の虚脱感があるでしょう。一般には大学入学の目的・動機の明確でなかった学生たちほどこの虚脱感から新しい大学生活のための緊張した心理状況へ回復してゆくことに日時を要するであります。もちろん、諸君の直面する問題はこれにとどまらない。入学にあたっての学長の告示のなかでも教官がガイダンスにおいても大学教育の目的が教育と研究にあることは、おそらく何らかの形で強調されるでしょう。しかし以上の事情から、これがいずれの学生の持つ目的意識ともただちに広く相呼応するというわけにはいかないものかもしれません。

諸君の入学を機に人生の先輩者として諸君に望むことを一、二述べてみたいと思います。

その第1は、有名な小説家のアンドレ・ジードがいったように「平凡なことを毎日平凡な気持で実行することが非凡なのだ」ということです。かのペニシリンを発見したアレキサンダ・フレミングは十年以上も毎日毎日、うまずたゆまず研究を積み重ねてきてこそこの大発見がなされたものと思います。彼は研究の途中偶然皿についた青かびを観察してみると見のがさなかったのです。継続は力なりといわれますが諸君もよく考えてほしいものです。ただ待っているだけでは幸運にめぐり逢うことはできません。

私の述べたい第2のものは、天才は99%のパーセプションであとの1%はインスピレーションだと云うことであります。即ち人間の能力は一人ひと

総合科学部長 岡本 哲彦

りの中に、埋まっているもので、それを掘り起こして鍛えて鍛えぬいてほしいことです。100の力を持つ人がいつも40か50程度の力しか出さないで生活し一度も全力を出すことが出来なかったとしたら、その人は40か50の値打ちしかない人間として、一生を終ることになります。自分に与えられた能力を出しきることこそ、人間として生れた自分自身に対する義務ではないでしょうか。

最後に「時は命なり」ということです。「時は金なり」といわれますが、時は金で買うことも出来ません。松下幸之助さんは「全財産を投げ出してもよいからもう一度青春をやり直したい」と云ったということです。それほど時は大切ですが、全く無埋な話であります。時間だけは誰も貯金できない、つまり使うことしかできないことをしっかりと知ってほしい。もっとも使わないでおいても時間は流れていくものであり、自分の時間を自分で有効に使うように一人ひとりが心がけてほしいものであります。諸君が総合科学部での4年間の時間を有効に使うことを念じてやみません。

『飛翔』紹介

—交通信号としての『飛翔』—

編集部

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。そして、卒業生の皆さん、社会人としての御活躍を期待しております。

さて、今年度も『飛翔』を続けてゆくことになりました。「どうして、こんなつまらないもの続けるのか。」という批判めいた意見も耳にしますが、そういった意見に対して、私達、新編集部としましては、いまだ説得力のある反論を持っておりません。しかし、ここで、敢えて、『飛翔』の存在価値について述べてみようと思います。

元来、総料は、せまい専門分野の枠に閉じこもらないで、隣接する諸分野と手をつないだ学際的、総合的研究を開拓し推進するため、「一学部一学科」に統合されています。しかし、それゆえに一学部としてのまとまりに欠ける面があることも否めません。『飛翔』は、その総料を、より固く結びつける為のシンボルとでも考えていただければよいと思います。

学生自治会というものを持たない総料においては、我々学生が、教官や事務職員の方々と対話・意見交換をすることの可能な『飛翔』は、参加の態度次第で、非常に意義深いものとなるでしょう。また、コース・研究室と分かれてゆくにつれて、つながりが弱くなりがちな学生同志の情報交換の場としていただいても結構です。

「あっ、こんな人もいる。」「あのコースではこ

んなこともやっていたのか。」と、一号ごとに、新たな発見をしてもらえればそれでいいと考えています。

総料の全構成員（教官・事務も含めて）が、それぞれ、その人なりの意見や考えを述べる。そして、それを『飛翔』を通して広く学部全体に知ってもらう。我々編集委員はその間に立つ、交通信号だと考えております。

従って、編集において、特定の見方はとりません。ただ、一人一人の意見を大切にし、それを広く大勢の人に送る。これが『飛翔』の編集だと考えております。

そういうわけですから、『飛翔』は面白くない、と他人事のように言わず、私の手で面白くしてやる、といった気持ちで、どんどん自分の意見の発表の場として、『飛翔』を御利用下さい。我々交通信号がネをあげるほどの投稿をお待ちしています。

また、私が実際に『飛翔』を作ってやるのだ、と思われる方は、積極的に編集委員として『飛翔』に参加して下さい。特に、新一年生の方々、総料に新風を吹き込み、新しい『飛翔』を作ってゆくのは、あなた方自身です。『飛翔』の新編集委員としての皆さんの力に期待しています。

『飛翔』は、そして、今年十周年を迎える総料は、今年度も、そして、今後も「飛翔」し続けます。

我が「青春」に悔いなし…!?

編集部

総合科学部が設立されて9年、今回で学部としては第6期生を、大学院では第4期生を送り出すこととなりました。この第6期生は共通一次第1期生でもあるのです。

『飛翔』編集部では、卒業生の方に大学生活をふり返って、特に印象に残ったこと、考えたこと、などを述べていただきました。

先輩達の経験は、我々後輩、特に新入生にとっては、これから総合科学部の第1歩を踏み出す上でこの上ない指標となり、また糧となることと思います。

テニス部の思い出

情報行動科学コース 上本 典子

あと3カ月で大学生活も終わろうとしています。あつという間の4年間でしたが、私が思い出せる事と言えばテニス部のことばかりです。入学早々体育会庭球部に入部しました。大学の部はさすが高校の時と違って厳しいものでした-あいきつ・時間厳守・マナー・トレーニング等-自分の知らない事ばかりだったので苦しいと言うより楽しかったです。1日中コートにいてテニスばかりしていました。

一番しんどいと思った事は時間の束縛でした。クラブであるからしかたありませんが、まとまった休みは夏季休暇の間1週間とゴールデンウィークと冬季休暇で、春と秋の休みは朝から晩まで練習です。よかったと思った事は、先輩、後輩、同学年の者と多くの仲間を得ることができました。「同じかまの飯を食う」という言葉がありますが、同学年の者は遠征、練習などで家族(一応私は自宅生)よりも接している時間が長い人達です。3年以上たった今では、兄弟、姉妹とも言えそうです。何もしていなかったらこれだけ多くの人とかかわりになれたか、違う学年、違う学部の人達と知り合えたかというのは疑問で部活動でできた人間関係が今、私の一番大切なものです。

4年間ずっとテニスをし続けて、少しはタイトルも取れたし、多くの仲間もできてとてもいい学生生

活だったと思います、でもちょっと残念に思うのはテニスしかできなかった事、バイトや旅行やもっといろいろやりたい事は多かったのですが結局あとは何もできませんでした。自分の体が2つあれば一方ではテニスをしてもう一方ではまだやった事のない何かにチャレンジすることができるのになあと感じています。

4年間は長いようでも何かしなければ何もしないままに終わってしまいます。また1年からやり直すことができるとしても、どこかのサークルに入って1日中やるでしょう。私としてはいろいろな事をしたかったけど、どれも中途半端であるより、一つの事を納得いくまでやった結果の方を選びます。



目指せ!熱中教師!(社会科の巻)

地域文化コース・日本研究 坂井 幸治

とにかく、試験の準備は早ければ早いほどいい。私が準備を始めたのが教育実習が終わってから、6月半ばぐらいであろうか。教員採用第一次試験は8月10日(以下、昭和57年度広島県・広島市教員採用試験の日時、内容について述べる。各県ごとに異なるので、試験を受ける者は各自よく調べておく方がいいと思う。)に実施されたから、1ヶ月半しか残された時間はなかった。おかげで、私はひどい目に会った、とだけ記しておく。とにかくひどい目に会った。あせりまくった。

一次試験の科目は、専門教養と一般教養である。専門教養は大学入試当時の実力があればやすやすと解答できる程度の問題であるが、その実力は3年の間に見事に欠落してしまっていて、それを取り戻すために異常な努力を要した。大学というところはいろいろな事象に関する思考力を培う場ではあるのだが、それとひきかえに高校時代の暗記のパターンを忘却の彼方に追いやってしまうところであるのかもしれない。今だに、第二外国語でふうふう言っている奴がいるが、これがそのいい例であろう。その上喫煙、飲酒、放蕩、無頼な生活のため大幅に暗記力が劣っている。これは間違いない。暗記の方法さえ忘れてしまっている。ひとつのことを覚えるのにかなりな時間が必要となる。これは筆者の場合だけでも知れないが……。だからである。ほんとうに子供が好きで、教員になって、日本の教育界に新風を吹き込み、一人の人間の形成過程において、よきインパクトを与え、すばらしい道標になりたいと思っている君、今からすぐ試験準備にとりかかるべきである。はっきり言って私は遅すぎた。

試験の準備は、4年ぶりの受験勉強といった風である。中学校、高校の時の教科書を繰り返し読み、受験当時やった問題集をやってみるのもいい。一般教養は、教員採用試験用問題集をするのもいいが、毎日、新聞を欠かさずに読むことも大切であると思う。

二次試験は教職教養と面接である。教職教養の内容は教育原理、教育心理、教育法規などが中心となる。大学の講義で、教職専門科目を受けていると思う。これを真剣に聞けば、随分と役立つとは思いますが、

やはり問題集による特別な勉強が必要であろう。

問題は面接である、広島県・広島市の場合は、集団面接(20分)と、個人面接(10分)があり特に集団面接は、横にすわっている受験者と比較するという形式をとっており、こちらの方としては随分緊張する。面接官の質問もかなり具体的で、難しい教育問題(例えば、非行問題など)に関して突っ込まれることを覚悟しておいた方がいい。結局、自分自身の教育に対する姿勢が問われるから、それなりの用意が必要である。口先だけで困難な質問を回避しようとしたり、したかぶりをするのは愚の骨頂である。教育に対するこちらの真剣な態度が伝わればいいと思う。

ただ、自分が総合科学部という珍妙な学部にいるという自覚を持ってほしい。広島大学には、教員養成課程をもった教育学部もある。学校教育学部もある。これらの学部から試験を受ける学生もかなりの数を占める。それらと比べて、それなりのハンディがあるのは間違いない。これらの学部生ははじめから教員になりたいと思って、確固たる問題意識をもって入学してきており、教員になるべくしてなっていくのだと思う。しかし、ここでなぜ自分が総合科学部に来たのかと問い直してほしい。そしてなおかつ「教員になりたい」と思う人がいれば、それはもう十分教員になる資格があるのだと思う。かなりひとりよがり、総合科学万歳の私見かもしれないが、私にはそう思えてならない。

今年の総合科学部の就職状況は、私の知る限りでは随分といいのではないかと思う。私の友人達も、意欲的に企業から資料を取り寄せ、会社訪問を繰り返し、入社試験を乗り越えてきた。たいへん忙しく東京、大阪方面を走り回ってきた奴もいる。また、公務員試験にむかって、夜を徹して勉強した奴もいる。どうしても教員になりたくて、4県もかけもち受験した奴もいる。みんなそれぞれにやるだけのことはやったといういい顔している。そして今だれもがそんな嵐のような生活を忘れたように、卒論に熱中している。——熱中しているというよりは追いたてられている。——追いたてられているというよりも……。もう時間がない。私にもない。浅霧君にはもったない。今へらへら笑っているあなたにもきっとなくなる時がくると思う。その時まで、思いっきり遊べばいいと思う。

P.S. 4年間なんてあっという間に……。

ガラスのジェネレーション 就職戦線！我、かく闘えり！

社会文化コース 畑尾 武海

大体僕は、昔のことは全て笑い話にしようという奇特な性格の人なので、就職活動のことも今となってみればなんてことはない。だけど、少しばかりマジに考えると、やっぱりゾッとしますな。とにかく、9月の終わりから11月の初めまでは長かった。冗談ではなく、ほとんど身も細る思いで、そして、やけ飲み、やけ食いしたので冗談でなく太ってしまた。(現在、まだ減量中61kgです。)

今、結論を言ってしまうえば、就職とは「努力」(この言葉は好きじゃないけれど)「実力」そして「運」です。また「自信」「謙虚さ」「客観性」だと思います。

総科生は、マスコミ志望者が多い。でも、僕の場合「広告会社」というミーハーなところなので、新聞社志望の人などにはあまり参考にならないかもしれません。

で、マスコミと一口に言うけど、マスコミにも「新聞」「出版」「放送」「広告」とありまして、ただ「マスコミに入りたい。」では、やっぱりヤバイのではないかと思います。僕の場合、マスコミには中学の頃から憧れていたし、広告業界には高校の時から興味がありました。新聞社も考えなかったわけではないけど、僕は「ペンで悪を糾弾する！」と言うほど正義漢ではないのを自分で知っていたのでした。(このへんがエライ)で、まあ、お祭り騒ぎが好きと言うことか、広告を選んできました。(本当は色々な理由もあるし、かなりの思い込みもあるけど、それはお酒を飲んだ時にでも話しましょう。)そして、



入れた、と言うことはやっぱり合っていたんだと思います。広告業界に。(なんと、面接は4回もあり、のべ20人近くの面接官に会っているのですゾ。)そして、マスコミ志望の人に、そのあたりをわきまえてほしいのです。

マスコミの場合、ペーパーテストなんぞがあるから、それなりの努力は絶対に必要だと思う。(特に新聞社はシビアですゾ。)だから、それは頑張るべきです。(共通一次の頃の知識がどれだけ欲しかったことか)でも、やっぱり一番重要なのは(入社してからのことも考えると)向き不向きだと思う。「客観性」と言うのはそのへんです。新聞社には、それなりの正義感を持った人が入るべきだし(と独断してしまう)、広告会社は、ほとんど病気がらい明るいんでない(とだめ(らしい))。そのあたりを、自分自身でしっかりと見つめ直してほしいのです。

総合科学部はマスコミ向きの学部です。(これは面接なんかで痛感した。)ある先生が、就職ガイダンスで「マスコミには万に一つも入れると思うな。」などと言っていましたが(訂正して謝罪しろ、Y先生総科生をバカにするな)、絶対にそんなことはない。だから、みんな頑張るしてほしい。

ただ、入ってよかったかどうかはこれからの問題。でも、そのあたりを今から心配しても仕方ないもんネ。だから、悔いの無い就職活動(そして大学生活)をしてほしい。後で後悔しても仕方ないから。(僕も、留年を覚悟してから気が楽になった。)

そして、脈絡もなく、佐野元春の次の言葉が好きです。「SOME DAY!」「つまらない大人にはなりたくない!」

好きなことやれよ!

(特)博報堂
勤務



総合科学部に在籍して

地域文化コース・ヨーロッパ研究 藤本 桂子

入学してまもない頃である。私は図書館の一角にいた。他学部に入學した高校の同級生達と共に、授業の時間割を作成するためである。めいめい学生便覧と首っぴきの静かなひとときが過ぎると、ものの30分もしないうちに友人達はみな顔をあげた。どうやら彼女達の時間割は完成したようである。まだ半分もできていなかった私は、驚いて彼女達の時間割を覗きこんだ。なるほど彼女達にとってみれば時間などかかるわけがなかったのだ。なぜなら週の大半が指定授業でうめられてしまい、残り少ない自由な時間にとれる授業はおのずから限られてくるからである。

それにひきかえ語学以外には指定授業などほとんどない私は、便覧に名を連ねる数多くの授業の中から取捨選択して時間割を組み立てていかねばならなかった。それはまるで色とりどりのパレットを片手にまっ白なキャンバスに思い思いの絵を描くようなものだった。思えばこれが総合科学部の特性を象徴していたのではないだろうか。その自由さとそれに伴う労苦と責任—それは単にカリキュラムの上においてのみならず、学生生活全般や卒業後の進路を示唆していたように思われる。

だが私達がいくら自由なカリキュラムを許されているとはいえ、全く規制がないわけではない。我々は4年間各自の専門分野にのみ没頭していることを許されない。それは総合科学部の理念が我々に課す使命である。

いったい総合科学部の理念に魅かれ、学際的研究を志して入学してくる者はどれくらいいるのだろうか。かくいう私は、学部の理念よりも入試のパンフレットに記されてあった「全学部中最も語学に力を入れている」という説明に魅かれて入学したのである。だから関心のない分野の授業まで受けねばならないことが重荷に感じられてならなかったこともある。他コースの専門の授業はどうしても一般教養の延長の感がなきにしもあらずで、単位数を揃えるため仕方なく出席していたものもあった。それらを専門に学ぼうとする人達に比べ意気が劣るのは否めない。

たとえ学際的研究を志す者があっても、4年間ですべて何ができるのだろうかというのが誰しもが感じる

疑問であろう。1つの専門分野を追求するのにも膨大な歳月が必要とされるのだから。私達が多種多様の領域にわたる授業をうけている間に、他学部の学生達は各自の専門分野に関する知識を深めていく。4年間を通じて文学部の学生達と共に授業を受ける機会の多かった私は、常にそういうあせりを感じていたものである。一つの専門分野すら自分のものできなくてどうして学際的研究などできよう。総合科学部の理念は、あまりにも高遠すぎて私には手の届かないものに思われた。

だが、4年間の暗中模索の末わかったことがある。大学での勉強はそれぞれの専門分野の研究に入るきっかけにすぎないということだ。そのきっかけは多ければ多いほど、多岐にわたればわたるほど、真に自分の求めているものに出逢う可能性が高くなる。そういう意味で我々総合科学部生は恵まれていると思う。眼前に現われるさまざまな分野の学問—たとえそれらが自分の求めるものではなくとも、それらの分野の研究を志す人々の話に耳を傾けるのは無駄ではない。そうすることで今まで自分とは全く無関係の、かけはなれた存在にすぎなかった分野の学問が急に身近なものに感じられてくる。書店へ行っても、それまでは気にもとめなかったコーナーの書物の背表紙を知らず知らず目で追っていたりする。あれほど苦しめられた「プログラミング通論」などはそのよい例で、情報化社会の到来が叫ばれる今日、少しでもコンピューターに親しむ機会を得たことは、今となってはありがたく思う。

学際的研究—と言葉でいうと難しく聞こえるが、私達が4年間のできる学際的研究とは、そういうことではあるまいか。すなわち他者が意味を見出しているうちこんでいることがらを少しでも理解し、共感すること、世の中のいろいろな部分について関心を深めることである。それこそが、学生便覧にうたわれているような、裾野の広い人間的教養を身につけた、



地球的規模に立つ視野をもつ人間への第一歩につながるのだろう。

もっとも同じ総合科学部内でも、理数系のコースにすすむ学生には、1年次から聴講に関する要望も多いときいている。地域文化コースにすすんだ私ほど、皆が自由な時間割を組めるとは限らないだろう。だが、少なくとも私達は、他学部の学生のように指定授業でがんじがらめになったり、留年の恐怖におののいたりすることはない。無に等しい状態から自分で時間割を組み立てる作業を通じてはじめて、私達は高校時代までの受身の学習とは違った自主的な姿勢が要求されることに気づく。なかにはその落差にとまどい、困惑し、ついにはノイローゼになりかけた友もいる。

おしきせのカリキュラムに従っていくのは、いくら安楽な道であろう。留年制度のあることも、入学後の解放感から糸の切れた凧のように舞い上がりそうになる心の1つの歯止めになる。しかし、めいめい慣れ親しんだ港を離れ、総合科学部という未知の大海へ船出した我々は、自らの手でかじをとり、進む方角を決めねばならない。進む速度さえ我々の手にゆだねられている。その厳しい荒海に放浪すること4年間、ようやくたどりつくべき岸の影が見えてきたようなこのごろである。

総合科学部と私

環境科学研究科2年 福高永太郎

我が学部には、バラエティーに富む専門分野が数多く、それも、従来の学部にはなかったような、学際的、境界領域的なものが目につきます。また学生には、この多くの専門の中から、自分の興味と適性に合った分野を選択する自由が、与えられています。

私の場合、環境科学コースで、第Ⅲ群(化学)を専攻したのですが、いろいろと目移りした結果、これだけの決定に、二年半を費やし、卒論研究の指導を受ける研究室(豊島教官)を決めた時点では、基礎知識として必要な、専門科目もまるで理解できずにいる状況でした。幸い、大学院に進学したおかげで、どうにか、研究活動の一端に参加する機会を与えられ、恵まれた環境の中で、多くを学ぶことができました。

今ふり返ると、卒論に入るまでの三年と、研究室での三年は、私には、どちらも、甲乙つけがたいほど有意義な時期であったと思われれます。自分が興味を持ってやれそうなことを、幅広い領域の中から選べるのは、我が学部の最も大きな特徴なのだから。

★ 特別研究論文題目紹介 ★

I 卒業論文

| コース | 氏名 | 論文題目名 | コース | 氏名 | 論文題目名 |
|------|-------|--|------|-------|---|
| 地域文化 | 島津貴宏 | キリスト教伝来とその禁圧—イエズス会士の日本における布教方法についての考察を中心として— | 地域文化 | 藤池洋一 | コンラート・フィードラ—芸術論 |
| 〃 | 多々良直子 | George Eliot: <u>Middlemarch</u> 研究 | 〃 | 上尾信也 | 市民としての音楽家像—18世紀市民 Georg Philipp Telemann 自由ハンザ都市ハンブルク |
| 〃 | 岡本繁泰 | イギリス系移民の歴史 | 〃 | 浅田由美 | 萩原朔太郎「月に吠える」形成期の研究 |
| 〃 | 柴田康仁 | 中国における『民主主義』の形成と発展—孫文の三民主義と毛沢東の新三民主義の比較 | 〃 | 生谷武寛 | 風土・言語・人間に関する一考察 |
| 〃 | 鈴木由利子 | ドラマに描かれたアメリカの家庭—個人的自由の追求か家庭の保全か | 〃 | 石村悦美 | 原民喜「夏の花」論 |
| 〃 | 高石勝 | 人形論 | 〃 | 伊藤ゆかり | L.B. ジョンソン政権—“貧困に対する戦い”を中心に— |
| | | | 〃 | 井上朋子 | 「マンフレッド」研究 |
| | | | 〃 | 今井仁志 | 現代イギリス経済の動向—構造的問題の分析— |
| | | | 〃 | 岩岬真理 | 英国産業革命期における労働 |

| コース | 氏名 | 論文題目名 | コース | 氏名 | 論文題目名 |
|------|-------|--|------|-------|--------------------------------|
| 地域文化 | | 者階級の Literacy (読み書き能力) と社会移動—ランカシャーを中心に— | 地域文化 | 山本京子 | 中国人移民排斥法の成立(1882)とその背景 |
| 〃 | 尾崎恵美子 | 山本周五郎研究—その女性観について | 〃 | 渡邊れい子 | 第二次 Ku Klux Klan の抬頭—その社会的背景 |
| 〃 | 越智聖司 | 言語と社会環境の関係についての基礎的考察 | 社会文化 | 平山荘一郎 | 「映画論」—その社会的考察 |
| 〃 | 叶井貫一郎 | 北からみた日本—19世紀ロシア知識人の日本観— | 〃 | 足立哲男 | 子どもの生活と教育に関する一考察 |
| 〃 | 北岡貴美子 | アメリカの文学作品 自動車—「成功の夢」におけるその意義と役割 | 〃 | 沖田史生 | 日本における道路政策 |
| 〃 | 小嶋由美 | 宮沢賢治と「注文の多い料理店」 | 〃 | 高田裕志 | 「日本人論」についての一考察 |
| 〃 | 坂井幸浩 | 中原中也研究 | 〃 | 長岡秀昭 | 高齢化社会の就業問題 |
| 〃 | 塩田佳枝 | 筒井康隆研究 | 〃 | 中村正憲 | 原子力発電を考える |
| 〃 | 圖子博子 | 乳製品の旅「蘇と酪の味を求めて」 | 〃 | 野添宣久 | 電源立地と地域社会 |
| 〃 | 鳥飼純子 | 1940年代における米国の対中国政策 | 〃 | 林信弘 | 教師の教育権と子どもの学習権保障—内申書裁判をめぐる一 |
| 〃 | 中尾昌子 | 18世紀の女性像—ロラン夫人をとおして— | 〃 | 伏見健一郎 | 自然保護と住民生活—カモシカ食害問題をめぐって— |
| 〃 | 仲山裕子 | マレーシアにおける米作農業の一考察 | 〃 | 牧興道 | 差別の構造—在日朝鮮人差別を手がかりとしながら— |
| 〃 | 西村さゆり | 樋口一葉論「たけくらべ」を中心に | 〃 | 浅霧雅晴 | ブーケの「二重経済論」についての一考察 |
| 〃 | 野村美香子 | 王権と女性の位相 | 〃 | 一反田幸 | 生活空間の文化人類学的研究 |
| 〃 | 畠山千珠 | ヒッピー意識とカウンター・カルチャー—1960～70年代アメリカ— | 〃 | 大西保子 | 日米の家族に関する一考察 |
| 〃 | 平野いつ子 | 16世紀宗教改革を境としてのフランス庶民階級の女性 | 〃 | 小河恭子 | 都市と農村における老人の生活実態の比較研究 |
| 〃 | 福嶋裕子 | 古代日本における「鬼」概念の変遷 | 〃 | 香月京子 | 1960年前後の軍縮をめぐる諸問題 |
| 〃 | 松下恭子 | 戦時体制下の国民統制について—平良村の部落会を例として— | 〃 | 神岡幹 | 地域開発と農業政策に関する一考察—農村を中心として— |
| 〃 | 三宗弘子 | 福沢諭吉の思想転回とその背景—『学問のすゝめ』と『文明論之概略』を中心として— | 〃 | 加美川英治 | フランス核戦略における一考察 |
| 〃 | 皆本育子 | アメリカ現代文学における都市—ドライバーとベローの場合 | 〃 | 古賀康記 | 偏見の意識構造に関する一考察 |
| 〃 | 三好加代子 | 松山藩における享保飢饉の一考察—義農作兵衛を中心として— | 〃 | 佐本尚子 | 広島における平和教育の現状と課題—高校生の意識調査を中心に— |
| 〃 | 三好正人 | 類比的の世界—アナロジ—から見た錬金術— | 〃 | 高木純 | 米ソの軍備競争と兵器移転 |
| 〃 | 門前美幸 | 中世英語の成立とその文化背景 | 〃 | 田口匡彦 | 原子力・エネルギー—論争に関する一考察 |
| 〃 | 安岡知子 | 文化財保護の史的分析 | 〃 | 田村清貴 | タイの経済発展と地域開発 |
| 〃 | 山下裕司 | イギリス革命とディガー運動 | 〃 | 中井佳世 | 戦争における加害と被害—原爆被災をめぐって— |
| | | | 〃 | 中川喜生 | 電気事業と地域社会—電源三法を中心として— |
| | | | 〃 | 西尾啓伸 | 現代都市の祭り—広島市の亥の子祭りをめぐって— |
| | | | 〃 | 野田幸夫 | 政治宣伝の分析 |
| | | | 〃 | 畑尾武海 | 日系アメリカ人のアイデンティティ—ミドルマン・ポ |

| コース | 氏名 | 論文題目名 | コース | 氏名 | 論文題目名 |
|--------|-------|--|--------|------|--|
| 社会文化 | 松尾能江 | ジションの民族としてー | 情報行動科学 | 宮川暢子 | クスの研究 |
| | 松下裕 | 通り魔的犯罪にみる現代社会 | | 宮田貞治 | 会話型図形処理システムの作成並びに覚せい剤濫用実態の研究 |
| | 村中百合子 | 大都市における高齢化とその反応 | | 山内由美 | ラットの回避・逃避学習事象における脳電気現象 |
| | 山崎昭彦 | インド連邦下院議員の政治的・社会的特徴 | | 山口美穂 | グラフィック表示のための新手法 |
| 情報行動科学 | 佐郷司 | コンピュータ教育の支援システムの研究 | | 横井尚子 | 太陽虫の捕食と摂食過程に関する研究 |
| | 嵐定浩 | 順序回路における検査入力生成手法に関する研究 | | 吉田明美 | アフリカツメガエル生殖腺の分化 |
| | 一色かおり | 非言語的コミュニケーションが説得に及ぼす効果に関する研究 | 環境科学 | 矢田孝 | 線画の情報圧縮とその再構成法 |
| | 岩根典之 | パーソナルコンピュータのグラフィック端末としての応用 | | 前田伸一 | 広島市周辺においてアカマツとクロマツとの間にみられる移入交雑 |
| | 上本典子 | コンピュータ・トモグラフィーの多項式構成法 | | 益岡正功 | マンローブ植物の種生物学的研究 |
| | 江戸研治 | 機能ブロックを含む論理回路におけるテスト生成手法に関する研究 | | 寿本幸広 | 一特に染色体についてー |
| | 金子誠 | 対人認知における相貌の特徴と推測過程に関する研究 | | 高松修治 | 琉球列島に分布するカンアオイ属植物の Chemosystematics |
| | 川上治美 | 軟体動物アカニシの心臓拍動の制御機構 | | 吉岡音弥 | リモートセンシングに関する基礎研究 |
| | 河田幸義 | 都市間の心理的距離に関する計量的研究 | | 阿部功 | 芸南地方の山火跡地における再生アカマツ林の生態学的研究 |
| | 斉藤芳江 | Morkor過程の函数解析学的研究 | | 泉哲哉 | バナッハ空間上の線形写像について |
| | 坂本幸恵 | 大量情報検索方式の構成 | | 今岡晶子 | SrFe _{1-x} Co _x O ₃ の磁性 |
| | 静文博 | コンピュータによるネスティング(配置問題)の基礎理論 | | 大内章義 | 土壌毛管濾過法による汚水の浄化について |
| | 清水司朗 | ネスティングに関する研究 | | 小野智子 | 社会混住化が河川の底生昆虫相におよぼす影響 |
| | 新谷義弘 | 2つのCPUを持つマイコンに関する研究ーマイクロコンピュータ・ネットワークを形成する場合ー | | 川口正 | 光合成における氷分解の分子機構 |
| | 塚野玲子 | 達成動機に関する実証的研究ーAtkinson・Weiner理論に関する一考察 | | 木山篤子 | 電気探査および自然放射能探査の結果と排水対策 |
| | 萩野正男 | マシン語解析のための一手法 | | 小泉伸 | リポソーム膜におけるチトクロムP-450 _{c21} と基質ステロイドの結合反応 |
| | 原田光一 | 不安に関する実証的研究ーpreperformance informationの効果についてー | | 神坂伸一 | 蒸散流と蒸散量に関する基礎的研究 |
| | 藤田千佳子 | 低酸素環境下におけるラットの順化過程ー学習行動と生理学的指標を用いてー | | | 酸化インジウム錫ーポルフィリン電極での光電流発生機構 |
| | 真玉保浩 | パーソナルコンピュータを用いたコンピュータグラフィッ | | | ファイババンドル上の接続の研究 |
| | | | | | 岡山県南部の陸海風に関する研究 |

| コース | 氏名 | 論文題目名 | コース | 氏名 | 論文題目名 |
|------|-------|---|------|-------|-----------------------|
| 環境科学 | 高村 収 | 広島県比婆郡東城町帝釈石灰岩台地の二疊系野旅山層の層位と地質構造 | 環境科学 | 松本 宏志 | ウシケノリの成分検索とその化学分類学的考察 |
| " | 目 耕 治 | 尾生地区における地すべり調査とその考察 | " | 宮内 浩 | マングローブ生育条件の研究 |
| " | 竹田 宣人 | 副腎皮質ミクロソームにおけるステロイドホルモンの生合成機構 | " | 森崎 忠宏 | ラーベス相化合物の水素貯蔵特性とその物性 |
| " | 田中 弘 | ブラウン運動の光散乱による研究 | | | |
| " | 中沢 泉 | 沿岸海洋生物の重金属濃度 | | | |
| " | 永田 好生 | 西条盆地北部におけるはげ山の形成と回復 | | | |
| " | 中村 浩之 | カルコゲナイドスピネル $cd(1n_1-x Crx)_2 S_4$ の光吸収 | | | |
| " | 平原 範昌 | ノルム空間とその双対空間 | | | |

II 修士論文

| 研究科 | 氏名 | 論文題目名 | 研究科 | 氏名 | 論文題目名 |
|-----|--------|------------------------------------|-----|-------|--|
| 地域 | 高野 敏夫 | 「筋骨系労働手段」から見た技術発達の一考察 | 環境 | | 生徒の達成行動に関する研究 |
| " | 池下 幹彦 | 「天国と地獄の結婚」論 | " | 秋山 剛志 | デンショバトにおける schedule - induced attack |
| " | 学頭 一成 | 凶像解釈への視角 | " | | -FR, FI, および Mult スケジュール下における mirror 反応について- |
| " | 久留島 幹夫 | 「中国新民主主義の研究」整風運動の役割について | " | 浅野 慎一 | 脱窒活性と環境条件 |
| " | 谷口 絹枝 | 『女人芸術』の研究 | " | 安倍 真澄 | 1. 酵母のペルオキシゾーム高純度標品を用いるペルオキシゾーム固有DNAの検索 |
| " | 岡本市郎 | 広島県における過疎地域の研究 | " | | 2. リゾチームの構造形成の動的機構 |
| " | 恩田 徹 | 非暴力の政治学序説 | " | 池見 直起 | 自己免疫複合体腎炎に作用する桂枝茯苓丸、五苓散および抵当丸の実験病理薬学的研究 |
| " | 長島 功 | 科学と技術と労働の相互関係から見た生産力の構造 | " | | I、甘日鼠について |
| " | 中山 一樹 | 人格概念の歴史的検討-個体的なものとの社会的なものとの関連について- | " | 植田 哲司 | 地すべり・山崩れの基礎調査に関する研究 |
| " | 早田 健文 | 玄洋社の思想-近代日本の『アジア主義』における玄洋社 | " | 内田 智久 | 大気質シミュレーション・システムの開発に関する基礎研究 |
| " | 古田 芳江 | 北村透谷論 | " | 大藤 智明 | 島根県中央部中新統の層位学的・古環境学的研究 |
| 環境 | 杉原 富人 | 両生類生殖腺のテストステロン受容体の分布 | " | | |
| " | 日向 鋭自 | 教師のリーダーシップ行動と | | | |

| 研究科 | 氏名 | 論文題目名 | 研究科 | 氏名 | 論文題目名 |
|-----|----------------|--|-----|-------|--|
| 環境 | 岡田裕之 | 各種農法の農園における昆虫相の特徴—自然農法と化学農法について— | 環境 | 山本真 | 森林生態系における物質循環 |
| " | 小野宏文 | 黄化カボチャ芽生中のサイトカイニンの分布と変動 | " | 與五澤令子 | Studies on Contraction Mechanism of the Ciliate, <i>Spirostomum</i> . (織毛虫 <i>Spirostomum</i> の収縮機構に関する研究) |
| " | 嘉村正紀 | イガイ平滑筋の神経薬理学的研究 | " | 渡辺純二 | カルコゲナイド・スピネル $Cd(\frac{1-n}{1-x} Cr_x)_2 S_4$ 系のラマン散乱 |
| " | 亀田真澄 | Submanifolds in a Riemannian product manifold (リーマン積多様体の部分多様体) | " | 渡辺朋也 | カブトエビの生理生態学的研究—卵のふ化に関する諸条件について |
| " | 児玉哲夫 | 海洋における重金属の分布と挙動 | | | |
| " | サイド・ジャンパクシユアスル | Estimation of Evapotranspiration from Crops on the basis of Water and Heat-Balance | | | |
| " | 佐藤敦 | On multicollinearity and variable selection (多重共線性と変数選択) | | | |
| " | 四宮彰彦 | 液体構造の摂動理論 | | | |
| " | 杉本篤 | 空間における点の配置パターン解析 | | | |
| " | 谷本茂 | 山火事跡地の斜面における土壌水の挙動 | | | |
| " | 中野敏子 | メドハギとネコハギにおける生活史戦略についての研究 | | | |
| " | 中野昌実 | 経路積分一場の量子論における— | | | |
| " | 中村修 | 磁性半導体 Eu_3As_2 および Eu_3P_2 の磁氣的性質 | | | |
| " | 原裕美 | チトクローム p-450 c_{21} と NADPH-チトクローム P-450—環元酵素の相互作用の解析 | | | |
| " | 平岡耕一 | ユーロピウムカルコゲナイドのNMR圧力依存性 | | | |
| " | 平山琢朗 | Regulation of HCl secretion in the eel stomach. (ウナギの胃における塩酸分泌の調節) | | | |
| " | 福高永太郎 | 光合成水光分解機能再構成と必須タンパク質 | | | |
| " | 松尾洋司 | 広島県緑化センターにおける水収支と土壌の物理性 | | | |

就職委員会だより

就職委員会

57年度の就職戦線は、例年と異なり、労働省の監督がないまま“会社訪問は10月1日解禁”という紳士協定のもとで始まった。このため大卒予定者の青田買いなどが増えて、一体どうなるのか心配であった。実際には、やはりコンピュータ関連企業の求人が出足好調であり、“協定”の破れ方も例年と大差なく、就職委員会で心配したようなことは起らなかった。しかし、景気の悪いせいもあって、就職状況は昨年より相当厳しくなったという印象である。別表の就職状況を見ると、就職傾向は例年と大差がないし、就職率も不況にもまげず例年どおりの率を確保できた。これには女子学生の諸君が熱心に就職問題と取り組んだ結果であるといえる。(男子学生諸君の奮起を期待したい。)自分の希望する所へ就職が内定し満足している者は、文科系の場合で就職希望者の1/3位、理科系の場合は2/3位と考えている。

委員会として気付いた点を以下に列挙するから参考にしてほしい。来年度の就職事情は一段と厳しいものと予想されるし、就職状況を見ると、質的にはまだ不満であるので、より良き就職を望んでいる委員会として今回は苦言ばかり並べることにする。

例年のことだが、教員、公務員志望が多く、採用試験の合格率が低い。不合格と判明した時点では、企業関係への就職は手遅れという場合が多い。だから、一般教育・専門教育の科目で必要とするものをよく勉強した者だけが、採用試験を受けるようにしてほしい。このことは、学部学生及び大学院生にも言えることである。

企業に就職したい者では、自分の進路をはっきり決めるのが、相変わらず遅い。夏休み中には就職希望先を決めてほしい。今年度は、学生の希望を聞いてから、各コースの就職委員と指導教官とが協力して就職活動をすることにした。もう遅いかなと思われる場合にも意外にも、面接をしてもらったことがある。企業の人事部の方々をよく学生を見ているなと云う感じがした。この不況の時代だから、“良い”学生だけを選んだ、そのために面接の機会を多く与えてくれたのだろう。指導教官の推薦状の有無が大きな影響を与えていることもわかった。

文科系学生の場合、指導教官—学生—就職委員会

の連絡が悪いことが多く、良い求人が来ても学生に伝えられない。これも就職状況が全体として低迷している一因である。

就職のための留年者が毎年少しづつ増加している。この種の留年は普通なら問題ではないが、不況時代においては、問題となるだろう。留年したから、来年は希望する所へ就職できたと言える場合は、良く勉強してきた者だけのようだ。1年間で急に十分勉強できるわけがない。希望の所へ就職できねば、留年したらよいと安易に考えてはいけない。企業の人事部の方が学部に来られたとき、いろいろと聞いて見るが、文科系の場合、学部卒を希望し大学院生は採らないと言われる、理科系の場合は学部卒はもちろん、大学院生(修士)を大いに希望するという話であった。年令制限も存在するようである。

プライドばかり高くて勉強しない者、単位の取りやすい科目を選んで卒業単位を揃えた者、やる気のない者は企業は絶対に採用しない。基礎的な勉強を十分にやっていない者は、就職10年後にどうなっているだろうかと、心配になる。とにかく、学生諸君4年間に学問的に大いに鍛えてもらわねばならないのである。

就職試験の重大さは、卒業時に“どの会社に入るか”、“どの職を選ぶか”によって、その後の人生が決まるのが、日本の社会である。それ故に生涯の目的をもって望まなければならない。

企業訪問、会社面接に際して、初歩的のマナーのとぼしい学生が多いと聞く……………礼儀作法に欠けるもの、応答の不明瞭なもの、地方出身者は、地方出身学生らしく、素朴に……………との企業人事部面接委員の言である。

これら就職試験、企業訪問に関しては、どんな事でも、就職委員会なり、厚生補導の就職担当なりに、相談に来られることを期待します。

最後に、学生の就職に関していろいろご協力をいただいた教職員の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和57年度卒業予定者進路状況

(58.3.10現在)

| 区 分 | コ ー ス | 地 域 文 化 | 社 会 文 化 | 情 報 行 動 科 学 | 環 境 科 学 | 計 |
|------------|-------------|------------------|------------------|----------------------------|------------------|-------------|
| 卒 業 予 定 者 | | 42 (27) | 30 (8) | 24 (12) | 27 (3) | 123 (50) |
| 進 学 | | 4 (1) | | 1 | 12 (1) | 17 (2) |
| 公 務 員 | | 8 (6) | 4 (1) | 1 | | 13 (7) |
| 教 員 | | 6 (4) | | 1 (1) | 2 (1) | 9 (6) |
| 企 業 | | 18 (12) | 22 (5) | 19 (11) | 10 (1) | 69 (29) |
| 自 営 | | | | | | |
| 無職(家事・その他) | | 6 (4) | 4 (2) | 2 | 3 | 15 (6) |

◎無職(家事・その他)の内、臨時教員2名、研究生3名を含む。

()内は女子で内数

就 職 企 業

(公務員、教員等を除く)

| 地 域 文 化 | 社 会 文 化 | 情 報 行 動 科 学 | 環 境 科 学 |
|--|---|--|---|
| シ ャ ー プ 富 士 山 東 洋 工 業 そ ぞ ヤ マ 全 日 空 ホ テ ル 日 本 情 報 産 業 日 本 生 命 連 合 会 福 武 書 店 ハ ル ヤ 書 店 岡 三 証 券 原 色 美 術 印 刷 ユニバーサル・リソーセス シドファイナル・アーツ ホーム・インターナショナル 学校法人長崎総合科学大学 | 朝 日 新 聞 中 国 新 聞 九 博 報 日 本 電 気 日 立 電 線 大 阪 日 立 電 機 日 本 電 装 立 石 電 気 西 武 百 貨 福 武 書 店 ユ ニ ー ド 佐 賀 生 協 わ か も マ ッ ダ 中 古 車 販 売 リ ク ル ー ト イ ン テ ッ ク ス 第 一 紙 行 タ カ キ ベ ー カ リ ー 乃 村 工 芸 社 ア イ ビ ー 化 粧 品 神 戸 Y W C A | シ ャ ー プ (4) 沖 電 気 日 本 I B M 流 通 情 報 セ ン タ ー 日 立 コ ン ピ ュ タ ー ・ エ ン ジ ニ ア リ ン グ 日 立 ソ フ ト ウ ェ ア ー 日 立 西 部 ソ フ ト ウ ェ ア ー (2) 日 立 家 電 関 西 日 本 電 気 ソ フ ト ウ ェ ア ー 日 電 東 芝 情 報 シ ス テ ム 日 精 コ ン ピ ュ ー タ ー 中 国 計 算 セ ン タ ー と 菱 船 エ ン ジ ニ ア リ ン グ 東 洋 工 業 ジ ャ ス コ 公 文 数 学 研 究 会 | 日 本 電 気 通 信 富 士 通 第 1 通 信 ソ フ ト ウ ェ ア ー 住 友 金 属 有 限 公 司 味 の 素 日 本 経 済 新 聞 四 国 計 測 工 業 天 満 屋 田 崎 真 珠 オ タ フ ク ソ ー ス |

(順不同)

わがフェニックス駅伝奮闘記

社会文化コース3年 井川 篤宏

昨年12月5日(月)、第20回フェニックス駅伝がおこなわれた。この記念すべき大会に出場が決まったのはソ連のブレジネフ首相他界というニュースが全世界を駆けめぐった11月11日であった。ゼミの先輩で院生の恩田さんがチーム名をポスト・ブレジネフヒーローズとしたのは、クレムリンはこの突然の人事異動にしばらくは対応できないのではないかと、との推定にもとづいていたこの推定は見事にはずれアンドロポフ氏が葬儀委員長にあっさり就任して、ポスト・ブレジネフ問題はジョン・国際関係論ゼミに参加して、まだ一年余りではあるが、政治変動の予測分析の難しさを痛感した。この余波が女子チーム結成につながり、ポスト・ブレジネフ・ヒロインズとして出場することになった。

1)メンバー選出にあたって 当初見込まれていたメンバーは補欠も含めて11人いた。そのうち、坂口君は大会の運営役員のためやむをえず断念。さらに身の危険を感じた森田君は、高校時代にふられた恋人の結婚式と称して逃亡。その時点で8区間のうち難所を走るようになっていた三年生は、三倉君と山中君と私だけになった。そのうち、最も期待をかけられていたのはサッカーの名門藤枝東高校出身の三倉君であった。第一回の合同練習においても彼の快脚は他をうならせるものがあった。悲劇が起こったのはその翌日の健康診断であった。期待の星三倉君は貧血の疑いで出場を断念せざるをえなかった。仕方なく、私は美貌で知られる山崎先輩に出場を依頼することになった。前途は多難といわざるをえない。

2)開幕前夜 軽いランニングを終えた我々男子8名、女子4名は、「下町のナポレオン(大分の麦焼酎)」を囲み高まる緊張感と興奮を共有していた。我が獅、森利ープレーイングマネージャーから選手一人一人にできたばかりの鉛筆模様のゼッケンとにんじん模様の凝ったハチマキを受けとった。吉川さんと豊永さんの労作であった。一区を走る野田先輩はリボン付きのタスキを目の前にして、しばし茫然としそのリボンを物欲しそうに見ていた坂口君の目は不運に打ちひしがれているように見えた。にんじんと鉛筆に追い回される夢を見たのは、私だけではなかったであろう。

3)決戦の日 全員の願いが天に通じたのか当日は、かなりな雨に見まわれた。私は、起きた瞬間、これほど雨に歓喜したことはなかった。しかし、我々と別の世界の人間、すなわち、坂口君を代表とする体育会の駅伝にける根性は多少の雨では揺るがないという事実を我々は知る由もなかった。

12時ジャスト、号砲とともに雨の森戸道路をスタートとした。硬式テニスでならした野田先輩に当初30位前後を期待していたが、ミュンヘン・オリンピックマラソンの優勝者フランク・ショーターら超一流選手にありがちな突発性便意から逃れられなかったところに、野田先輩の一流さがうかがわれる。61位で2区に引き継いだ。2区の高木先輩の結果には触れないが、肺炎を起こしかねない悪コンディションで完走された先輩の根性は我々が今後身につけねばならないことであると痛感した。これも、卑法にも逃亡した森田君に多大なる問題がある。私が最も不安であった山崎先輩に対しては認識の転換をはかるとともに、ここに無礼を陳謝しなければならない。蝶ネクタイをハチマキに変えた先輩の快走により105位で4区の山中君にタスキを引き継いだ。唯一現役の体育会サークルに所属する彼は、力を出しきれず余力を残しすぎて104位で松下先輩に引き継いだ。松下先輩は現状維持で走り終えたが、探険部で鍛えられた健脚は平坦な道では活かされず、これがジャングルであれば……。6区は私が受け持ったが、カメラと女の子を意識しすぎて、5人に抜きさらされた。平常心を保つのが私に課された課題である。7区の恩田先輩に、共通一次世代との根性の違いをまざまざと見せつけられる思いがした。鬼気せまる形相で8人抜き去った。

4)ヒーロー登場 アンカーは、仁保の淵崎公園から広大まで5.7kmを森先生がしめくくられた。平均所用タイム25分では自己表現が不可能と判断された先生は37分20秒をもって燃焼された。さらに遅い学生を1名計算に入れていたことを考えるとその冷徹なまでのイメージにただただ感服するのみである。ゴールで待ち受ける我々の頭に浮かんだのは、手違いがあって実現はしなかったが、先生が起草された選手宣誓の文言であった。

「私は、全ての選手の名において、自らの体力の限界に挑戦し、世界平和を願いつつ、最後までひたすら走ることを誓います。1982年12月5日『ポスト・ブレジネフ・ヒーローズ及びポスト・ブレジネフ・ヒロインズ』主将、炎のランナー森利一」

5) 総括 男子に比べ、女子の活躍は見事であった。65チーム中30位で、総合科学部長杯を受けるところとなった。女性上位と噂されるゼミを象徴しているようである。それにしても、男子チームは、女子チームの獲得した総合科学部長杯をかこんで森先生の

獲得した特別賞の副賞でコンパにあづかった。感激したことは、岡本学部長の粋なとりはからいであった。女子の部の学部長杯の副賞はコココーラが普通なのに、なんと清酒一級二本引き換え券がついていたのである。コンパが盛り上ったのはいうまでもない。

次回こそ、体力+教養のレベルアップをはかり、フェニックス駅伝にカケルことをここに宣言する。

◀編集後記▶

クラブもやめまし、今年は「飛翔」に……。勉強が……。ドイツ語が……。単位が飛んでゆく。(阿部由幸)

ほとんど、何もしてないのに、こんなところに載るからには宣伝なぞひとこと。新入生の皆さん、新2年生の諸君！「飛翔」でお待ちしております。

(重本知子)

只今、試験のまっ最中！他の事するヒマが無い。

(井上亮一)

おじさん砂糖がない。どこ見とんや。わけのわからないことを言っていました。(隠岐幸代)

もう甘えは通用しませぬ。次号からは私たちの時代であります。ガンバリマジョウね、新編集長！

(桐木淳二)

昨年も、人に頼りきっておった。さ、3年生になったら自立する！3年生になったら勉強する、3年生になったら……。今年もよろしく。(高上佳子)

実験に追われて、あまり仕事に参加できませんでした。今年は某先輩のように、適度にさぼり、編集の手伝いをしたいと思います。「飛翔」の最長老として老体にむち打ち頑張ります。(竹下 斉)

尾道に行って、ちのみちにかかり、呉でみた暮は三原市がよかった。これでいいのか助さん。インデアンもびっくり変酋長。(橋本記一)

今回も大したことができなかつたよ〜。「飛翔」の

御意見番、大原高志は今日もゆく。(大原高志)

「飛翔」編集委員の中では一応自称No.2。現在の編集部員のうちでは最古参なのに、編集は編集長に頼り切り。2年間ごころうさんでした。しかし今年はきつかった。私の所属する藤原研究室は、三浦先生のよくいらっしゃるLL準備室のすぐ近く。加えて藤原先生は「飛翔」編集委員。突然「雲井君！」と三浦先生の声が……。 「雲井君！」また、声が聞こえてきそうです……。 (雲井 司)

「飛翔」専属カメラマン兼ドライバー(決して、ネジ回しではありません。)として2年半。間違いの始まりは……。あのビスケットを食べてなければ、今ごろは自由の日々を……。 (広谷義明)

あつというまに、大学生活も3年間が終ってしまった。特に昨年は短かかったなあ。

ところで、最近の大学生は本を読まぬ、というが、藤原新也『東京漂流』(情報センター)、読んでほしい。(松浦 豊)

昨年度は、教官編集委員の中で、山下彰一先生と堀信行先生のお二人が、海外出張されました。表紙写真は、山下先生が1982年7月～9月、NIDA(National Institute of Development Administration: 大学院大学)の客員教授として、タイ滞在中に撮影されたものである。

統合移転計画繰り下げ

新聞報道などで、すでに御存知のことと思うが、新キャンパスへの移転計画が繰り下げられた。1月18日の発表によれば、生物生産学部の移転を昭和61年3月に、その後続く学部は順次現行計画より4年ずつ遅らせることになる。総合科学部は、昭和62年度に移転が予定されている。移転年次計画の変更はこれが2度目である。